

1 6 文学的文章(5) (P 36 ~ 44)

- (1) ① 緊張 ② オ (2) エ (3) イ
(4) (例) 鮎を三十銭で買うという(こと)。
(例) 鮎十五尾を〇三十で買う(こと)。
(5) A イ B オ
(6) 小悪魔ども・悪賢い商人

(7) (例) 少年たちが、私に鮎をくれる決心をしたという(こと。)

(8) (例) 少年たちが、ただで鮎を私にくれた(こと。)

(8) 工

(9) (例) 私が売ってくれといった(ことが原因だと思ったから。)

(例) 金銭のやりとりにした(ことが原因だと思ったから。)

(10) 中二日おいて

解説

(1) 直前の場面の描写に「彼らの顔になにか共通のものが走り、さっと緊張にとらえられるのが認められた」とあります。この場面の続きとして「少年たちは唾をのみ、水漬をすすり、バケツの側にいた一人は片足の親指で片足のふくらはぎをかいた」があることから考えます。有利に商売をすすめようとする少年たちの、緊張した姿態を巧みに描いた表現です。

(2) 「懐柔」は「うまく手なずけて、自分の思いどおりにさせること」です。ここでは鮎の買い取りを申し入れた「私」に、いかに多くの金を出させるかが、少年たちの関心であることを読み取ります。「一人はバケツへ手を入れて一尾の鮎をつかみあげ、金色にうるこの光るその獲物をさも惜しそうちに、また自慢そうちに、そして私の購買欲をそそるように、ほれほれと眺めながら言った、『こんなえつけ金鮎はめつたに捕れねえかな。』『鯉っこくれえあんべえがえ。』などの少年たちの動作やことば、また、「私」とかんぷりとのやりとりから、「私」の購買欲を刺激し、できるだけ鮎を高値で売りつけようとしている少年たちの姿が浮かび上がってきます。

(3) 「右翼」には、いろいろな意味があります。ここでは、軍隊で、成績最上位の者が右端に位置したことを踏まえて、かんぷりが少年たちの代表として、「私」との交渉の任に当たることになったことを表しています。

(4) 本文には「私」の答えは直接は何も書かれていません。具体的な金額を「私」に発言させていないのは、作者の表現技法です。しかし、このあとの、「甘露煮にすれば一尾それだけの値になる物を、十五尾まとめで〇三十で買うという根性も……」と「私」の心情を説明している部分から、「私」の答えの内容は十分に推定することができます。したがって、「鮎を安く売ってほしいということ。」のように値段が具体的に書かれていないものや、「鮎をただで譲ってほしいということ。」のようなものは、すべて不適切です。

(5) かんぷりが土地の佃煮屋で売っている鮎の甘露煮を引き合いに出して、鮎の値を上げようとしているのに対して、「私」は、「調味料や燃料を使い、売り物としてきれいに注意深く仕上げられた鮎と、同一に比べるという法はないだろう」と感じています。これが「前者の怒り」につながっています。同時に、「甘露煮にすれば一尾それだけの値になる物を、十五尾まとめで〇三十で買うという根性も、相手を子供とみくびっているようでさもしい」とも「私」は感じています。これが「後者の恥」につながっています。

(6) 「私」をかつこうの金づると考えはじめた少年たちが、「私」の弱みにつけこみながら鮎を売りつけてくる様が、「私」にはどう見えたかを考えます。「小悪魔どもが私を放さないだろう」「彼らは悪賢い商人だったからだ」が、「奸悪な計略を持つ少年たち」を的確にたどった部分です。(7) 「私」を驚かせるような「まったく予想しない事」とは、それまで「私」にとっては小悪魔であり、悪賢い商人であった少年たちが、「私」の窮状を知るや、急に、いままで高く売りつけようとしていた鮎を、ただでやろうと言いだしたことです。この少年たちの変化が、「私」に反省を求めるといふ形で、この物語は終わっています。

(8) 「囚われの縄」に縛られていたのは少年たちです。少年たちが、「私」

を相手に、鮎を捕まえては高く売ることばかり考えている状態をとえています。

(9) 「私」が「少年たちに狡猾と貪欲な気持ちを起こさせたのは私の責任である」と考えた理由は、直後の「初めに私は『この鮎をくれ。』と言えばよかったのだ。売ってくれと言ったために、彼らは狡猾と貪欲にとりつかれた」と、「私」が自ら招いた事態を省みている部分に書かれています。

(10) 挿入する文章の最初の一文「私はその鮎を味噌煮にした。」、本文中の「私は前の味噌煮を井へ移して、それらの鮎を新しく味噌煮にしかけた。」に着目します。「その鮎」の「その」、「それらの鮎」の「それら」が何を指しているか、細部のチェックを確実にすることが大切です。

ことばの教室

1

(1) も (2) じこけんお (3) じゅうたい (4) たんそく

(5) かんまん (6) 獲物 (7) 暗黙 (8) 購買 (9) 調味

(10) 栓 (11) 感触 (12) 紛

2

(1) 「おもむろに」は「しずかに。ゆっくり」という意味です。

(例) 父はおもむろに話しはじめた。

(例) 兄はおもむろにポケットからハンカチを取り出した。

(2) (例) 試合に勝った妹はさもうれしそうだった。

(例) 母は私の合格をさも自分のことのように喜んだ。

(3) 「あたかも」は「ちょうど。まるで」という意味です。

(例) 山頂からあたかも山のような雲がわきおこっている。

(例) 子どもたちはあたかもクモの子を散らすように逃げた。

(4) 「いかなる」は「どんな。どのような」という意味を表します。

(例) 私はいかなる苦勞をしてもやりとげる決心です。

(例) 彼女はいかなる迫害にも負けませんでした。